

カインとアベルー神のようになった者の結末

〔聖書〕創世記4章1-16節

4:1 さて、アダムは妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み、「わたしは主によって男子を得た」と言った。4:2 彼女はまたその弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。4:3 時を経て、カインは土の実りを主のもとに献げ物として持って来た。4:4 アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た。主はアベルとその献げ物に目を留められたが、4:5 カインとその献げ物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた。4:6 主はカインに言われた。「どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか。4:7 もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求め。お前はそれを支配せねばならない。」4:8 カインが弟アベルに言葉をかけ、二人が野原に着いたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。4:9 主はカインに言われた。「お前の弟アベルは、どこにいるのか。」カインは答えた。「知りません。わたしは弟の番人でしょうか。」4:10 主は言われた。「何ということをしたのか。お前の弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる。4:11 今、お前は呪われる者となった。お前が流した弟の血を、口を開けて飲み込んだ土よりもなお、呪われる。4:12 土を耕しても、土はもはやお前のために作物を産み出すことはない。お前は地上をさまよい、さすらう者となる。」4:13 カインは主に言った。「わたしの罪は重すぎて負いきれません。4:14 今日、あなたがわたしをこの土地から追放なさり、わたしが御顔から隠されて、地上をさまよい、さすらう者となってしまえば、わたしに出会う者はだれであれ、わたしを殺すでしょう。」4:15 主はカインに言われた。「いや、それゆえカインを殺す者は、だれであれ七倍の復讐を受けるであろう。」主はカインに出会う者がだれも彼を撃つことのないように、カインにしるしを付けられた。4:16 カインは主の前を去り、エデンの東、ノド（さすらい）の地に住んだ。

ヘブライ人への手紙 11章4-6節

11:4 信仰によって、アベルはカインより優れたいけにえを神に献げ、その信仰によって、正しい者であると証明されました。神が彼の献げ物を認められたからです。アベルは死にましたが、信仰によってまだ語っています。11:5 信仰によって、エノクは死を経験しないように、天に移されました。神が彼を移されたので、見えなくなったのです。移される前に、神に喜ばれていたことが証明されていたからです。11:6 信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神が存在しておられること、また、神は御自分を求める者たちに報いてくださる方であることを、信じていなければならないからです。

〔序〕神のようになろうとして

全能の愛の神さまは、一番はじめにこの世界をエデンの園・楽園と呼ばれるにふさわしく、very good に創造されました。しかし、今日の世界は、決して楽園ではありません。戦争や殺し合いがいたるところで起こり、多くの人が苦しんでいます。恐ろしい犯罪や様々な悪がはびこっています。人々の心は荒れていきます。経済的な豊かさを手にしながら、空しい思いを抱く人が増えています。世界は楽園ではなくなってしまうました。楽園はどうして失われてしまったのでしょうか。

アダムとエバが禁じられた木の実を食べてしまったからです。楽園の中でただ一本だけ禁じられていた木——それは善悪の知識の木でした。善悪を知ることは道徳の土台です。善悪を知ること、私たちにあって大変に大切なことです。どうして神さまは善悪の知識の木の実だけは食べてはいけないと禁じられたのでしょうか。

これは、私たちが善悪を知らなくてもよいと言われているわけではありません。何が善で何が悪かを決定する権威は、人間が持つてはいけない、あくまでも神さまの手にあったほうがよいということなのです。なぜならば、人間がそれぞれ自分で善悪を決めると、みんなが自分の都合の良いように善

悪を決めるようになって悪が生まれるからです。例えば社長が辞任に追い込まれた三菱自動車は、長年にわたり、自分の作った自動車の欠陥から起こった事故を隠し続けて来ました。政府の調査にもうその報告をし続けました。人の命よりも、法律よりも、自分の会社の体面や利益の方が大事だったからです。会社にとって都合の良いことが善であり、都合の悪いことが悪だったのです。学歴があり、能力も人柄も優れた立派な人たちが大勢いながら、このおかしい善悪の判断を自分たちで直すことがどうしても出来なかったのです。

「善悪を知るものとなる」ことは「神のようになる」ことだと蛇がささやきました。神のようになる——これが決定的な言葉になってエバもアダムも負けてしまいました。Very good な楽園を守り続けていく任務をゆだねられていたアダムとエバが、神のようになろうとした時、楽園から追放されてしまいました。人間が神のようになろうとして、楽園を失ってしまったのです。これが創世記 3 章のメッセージでした。今日は第 4 章、楽園を失ったアダムとエバの身に何が起こったかについてです。

〔I〕家庭を崩壊させた殺人事件

アダムとエバ夫婦にカインとアベルという二人の兄弟が与えられました。兄カインは土を耕す農夫に、弟アベルは羊を飼う者になりました。収穫の時となり、カインもアベルもそれぞれ献げ物を持ってきて神さまを礼拝しました。

ところが神さまは、アベルの献げ物の方をお喜びになり、カインの方はお喜びになりませんでした。神さまのそのようなお心を感じ取ったカインは、激しく怒って顔を伏せました。激しく怒ると体中の血がガーッと上がって頭が重くなり、自然に下を向くのだそうです。知りませんでした。今度よく注意して自分を観察してみましょう。でもそんな時は冷静でなくなっていて観察どころではありませんね。

神さまはカインにおっしゃいました。

「どうしてそんなに激しく怒るのか。罪が心の中に入り込もうとしている。お前は罪を支配しなければいけない」。

しかしカインの耳には、神さまの忠告が入りませんでした。そして弟アベルを野原に錬れ出すと、いきなり殺してしまいました。

神さまはおたずねになりました。

「お前の弟アベルはどこにいるのか」。

「知りません。わたしは弟の番人でしょうか」。

しかし神さまはご存知でした。

「何ということをしたのか。お前の弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる」。

誰も見ていない野原に連れ出して殺したのです。アベルはずはないとカインは思っていたのでした。神さまはカインに裁きを下しました。

「アベルの血を飲み込んだ土からはもはや何の作物も出てこない。お前は地上をさまよい、さすらう者となる」。

カインは神さまに訴えました。

「わたしの罪は重すぎて負いきれません。神さまから見捨てられてしまったら、知らない土地をさすらう間に、知らない人によって殺されるでしょう」。

カインは人を殺したことで、今度は自分が殺される恐怖におびえるようになったのです。殺されたア

ベルの叫びがカインの心にとりついて、離れなくなってしまったのでしょう。

神さまはカインにおっしゃいました。

「お前を殺すものは誰であろうと7倍の復讐を受ける」。

神さまは誰もカインを襲うことがないように神さまの約束のしるしをつけて下さいました。こうしてカインは、アダムとエバの住むところから、さらに遠くノド(さすらいの地)に住むことになったのです。

〔Ⅱ〕カインとアベルの違い

樂園を失った人間が最初に経験した悲劇は、兄が弟を殺す殺人事件だったのです。アダムとエバ夫婦は息子の一人を殺され、殺した方のもう一人の息子は、彼らからさらに遠くへ追放されてしまい、息子を二人とも失ってしまったのです。たとえ世の中が荒れても、せめて家庭だけは暖かい憩いの場でありたいと誰しもが願います。でもせつかくの親子4人が、愛し合い助け合って生きていくことさえできなかったのです。何という悲劇でしょうか。まさに樂園の喪失です。

どうしてこんな悲劇が起こったのでしょうか。事件の発端は収穫物の中から、それぞれ供え物を用意して神さまを礼拝したのに、神さまがアベルの供え物はお喜びになったのに、カインの供え物の方はお喜びにならなかったからでした。それでカインは非常に怒ってアベルを殺してしまったのです。

神さまはどうして両方の供え物を喜んで受けなかったのでしょうか。親はわが子が5人いれば5人も公平に愛して育てなければいけません。「ズルイ！」という言葉で兄弟ゲンカが始まります。自分よりいい目にあうと怒るのです。だから「えこひいき」は、親も教師も禁物です。神さまはどうしてカインとアベルを公平に扱われなかったのでしょうか。畑の作物よりもあぶら味のある小羊の肉の方が好きだったのでしょうか。昔からこの点についていろいろな解釈がなされてきたそうです。どの教師も必ず「どうして？」という質問を受けたからです。そこで今日は私なりの解釈を申し上げます。皆さんは皆さんでお考えになってみてください。

カインとアベルについては、新約聖書に6ヶ所出てきます。第一ヨハネ3:12、ヘブライ11:4、マタイ23:35、ルカ11:51、ヘブライ11:24、ユダ11、これらを読みますと、新約聖書を生み出したキリスト教会では、カインとアベルを次のように見えています。

神に捧献げ物をする行いに於いて、アベルは正しかったが、カインは間違っていた。そこでカインは正しく献げたアベルを殺した。どこが正しく、どこが悪いのか、「信仰によるかよらないか」である。アベルは信仰によってカインよりも優れたいけにえを献げたので、神に認められ、神に喜ばれた。それに対してカインは信仰によらずして献げたので、神に喜ばれなかったのだ、なぜなら、「信仰がなければ、神に喜ばれることはできない」からだ。

ここで大切なのは、カインがアベルを殺したので悪い者だと言われる前に、信仰を持って献げ物をしなかったのが、悪かったと言われている点です。ではアベルには信仰があったということがどこでわかるのでしょうか。

創世記4章3～4節を比べてみましょう。

- ・カインは土の実りを主のもとに献げ物として持って来た
- ・アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た

カインの場合は、ただ「土の実り」とあるのに、アベルの方は「羊の群れの中から、それも最良のものを、それも自分自身で持ってきた」。Today's English Version では「Then Abel brought the first lamb born to one of his sheep, killed it, and gave the best parts of it as an offering 」となっています。

カインの方は献げ物を特別に吟味する心がなかったのに対して、アベルの方は最良のもの (the best parts) を心をこめて選んだようであります。神さまを礼拝しようとする事について、心のこめ方が違っていた、そこに信仰のあるなしが現れている、というのです。

〔Ⅲ〕カインの致命的な誤り

ところがカインは、アベルと自分との間に、神さまに対する信仰の違いがあり、それが献げものに表れているなどということが、わかりませんでした。彼には、自分たち二人に対する神さまの態度の違いだけしか目に入らなかったのです。

同じように献げ物をしたのに、「何故だ、どうしてだ、えこひいきだ、兄をさしおいて神様に取り入るなんて、弟のくせに生意気だ！」と、カインの心に生まれた怒りは、一気に激しく燃え上がりました。そして神さまの忠告も耳に入らぬままに、アベルを野原に誘い出して殺してしまいました。

カインはどうして自分を反省できなかつたのでしょうか。「神さまともあろうお方が、自分たちと同じにえこひいきなさるなんて、ありえない。これには何か深いわけがあるはずはずだ」と、自分の心や行動をよく吟味してみることが、どうしてできなかつたのでしょうか。

わたしはカインのこの姿に、神に問うことをしなくなった人間の誤りを見る思いがするのです。神さまがアダムとエバに求められたたった一つの大変なことは、「何が善で、何が悪かについては、自分勝手に決めないで、私に聞きなさい」でした。ところが、一つひとつ神に聞くことが煩わしくなってきました。自分の判断と責任でやってもいいではないか、我々はもう子どもではない、自主独立した大人なのだ！

このアダムとエバの心を「神のようになる」という蛇の言葉がゆさぶりました。そして禁じられた木の実を食べて神のようになろうとしたのです。神のようになるとは、神さまに聞く心を失うことです。神さまを必要としなくなるのです。

アダムとエバは、神さまを必要としなくなった時、神さまの造られた樂園を失いました。彼らが生み育てた長男カインをご覧ください。彼は神さまに献げ物を捧げて礼拝しながら、形式ばかりで、神さまに問うことをしていません。聞く心が全くなくなっていたのです。だから自分の考えでやった行動に No が出た時、神さまに対してすら、激しい怒りを表しました。カインの頭の中にも心の中にも、自分の判断しなかつたのです。もっと良い判断や行動がほかにあるかもしれないとか、自分は間違っているのかもしれないなどという思いが全くなくなっていました。これが「自己絶対化」です。自分が神になってしまっている姿です。

こうして神のようになろうとしたアダムとエバの罪が、我が子の殺人事件に具体化して現実のものとなってしまったのでした。

[結] 神に喜ばれる者

シンガポールに来て「a free thinker」という言葉を識りました。クリスチャンとか仏教徒というような特定の信仰を持たないで生きている人たちが自分をそう呼んでいるのです。神さまとか特定の教義に縛られず、自由な考えと生き方ができる人——日本人好みのする言葉ですね。

多くの日本人も、イエス・キリストを救い主と信じ、神さまを礼拝しながら生きていく信仰生活を、神さまに束縛された不自由な生き方を強いられるという思いで見えおられるのでしょう。

でも皆さん、神を信ぜず、神に聞くことをしない人間は、いざという時にカインのようになってしまうのです。自分を否定されたと思って激しく怒り、悪の餌食になって罪を犯し、その自分の罪の重さに生涯おびえて地上をさ迷い歩く者になってしまうのです。

カインとアベルを取り上げた新約聖書ヘブライ人への手紙は、その締め括りとしてこう述べています。「信仰がなければ神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神が存在しておられること、また神はご自分を求めるものたちに報いて下さる方であることを、信じていなければならないからです」(11:6)。

神さまに喜ばれる信仰の持ち主とは

1. 神さまが確かにおられること
2. 神さまは、祈り求めるものに必ず答えて下さる方であることを信じる者をいうのです。

神さまは、この世界を楽園として創造され、私たちが住まわせて下さった全能にして愛の神様です。神さまこそ何が善で、何が悪であるかを正しくお決めになる真理と正義の土台です。神さまこそこの世界の唯一の主です。その神様を信じ、神さまを礼拝し、み言葉を聞きつつ生きていく者が、神さまに喜ばれる信仰者なのです。

カインは誰も見ていない野原でアベルを殺しましたが、アベルの叫びは、神さまに届きました。神さまは祈りを必ず聞いて答えて下さるお方です。

「アベル」という名は、はかなく無価値な存在という意味を持つ語だそうです。自分でよく考えて信仰をもって最善の献げ物をしたのに、不信仰で強い兄にひとたまりもなく殺されてしまいました。何んとはかない人生でしょうか。信仰深く良いことをしたのに、それを怒って殺してしまう強い者の悪は恐ろしくて理不尽です。やはり私たち人間は楽園を喪失してしまいました。

でも神さまは、この弱くてはかないアベルの叫びを聞き逃されませんでした。そして、カインを厳しくお裁きになりました。アベルの流した血は「正しい人アベルの血」(マタイ 23:35)として歴史の中

で正しく評価されています。さらに、イエス・キリストが十字架で流された血を語るときに引用されています(ヘブライ12:24)。

アベルの短い人生は、カインのさまよう人生よりもはるかに大きな意義を持つものとなりました。神さまが必ず祈りに答えて報いて下さるからです。

カインとアベル、皆さんはどちらの人生を歩まれますか。

「アベルは死にましたが、信仰によってまだ語っています」とあります。我が子や、後から来る人々に、信仰によって語り続ける生涯を送られませんか。

信仰がなければ神に喜ばれることはできません。どうぞ、明確な信仰をもって人生を歩んで下さい。